女人創造

太宰治

男と女は、ちがうものである。あたりまえではないか、と失笑し給うかも知れぬが、それでいながら、くるしくなると、わが身を女に置きかえて、さまざまの女のひとの心を推察してみたりしているのだから、あまり笑えまい。男と女はちがうものである。それこそ、馬と火鉢ほど、ちがう。思いにふける人たちは、これに気がつくこと、甚（はなは）だおそい。私も、このごろ、気がついた。名前は忘れたが或る外国人のあらわしたショパン伝を読んでいたら、その中に小泉八雲の「男は、その一生涯に、少くとも一万回、女になる。」という奇怪な言葉が引用されていたが、そんなことはないと思

う。それは、安心していい。

日本の作家で、ほんとうの女を描いているのは、秋江（しゅうこう）であろう。秋江に出て来る女は、甚だつまらない。「へえ。」とか、「そうねえ。」とか呟（つぶや）いているばかりで、思索的でないこと、おびただしい。けれども、あれは、正確なのである。謂（い）わば、なつかしい現実である。

江戸の小咄（こばなし）にも、あるではないか。朝、垣根越しにとなりの庭を覗（のぞ）き見していたら、寝巻姿のご新造が出て来て、庭の草花を眺め、つと腕をのばし朝顔の花一輪を摘（つ）み取った。ああ風流だな、と感心して見ていたら、やがて新造は、ちんとその朝顔で鼻をかんだ。

　モオパスサンは、あれは、女の読むものである。私たち一向に面白くないのは、あれには、しばしば現実の女が、そのままぬっと顔を出して来るからである。頗(すこぶ)る、高邁でない。モオパスサンは、あれほどの男であるから、それを意識していた。自分の才能を、全人格を厭悪(えんお)した。作品の裏のモオパスサンの憂鬱と懊悩(おうのう)は、一流である。気が狂った。そこにモオパスサンの毅然(きぜん)たる男性が在る。男は、女になれるものではない。女装することは、できる。これは、皆やっている。ドストエフスキイなど、毛臑(けずね)まるだしの女装で、大真面目である。ストリンドベリイなども、ときどき熱演の

あまり鬘（かつら）を落して、それでも平気で大童（おおわらわ）である。

　女が描けていない、ということは、何も、その作品の決定的な不名誉ではない。女を描けないのではなくて、女を描かないのである。そこに理想主義の獅子（しし）奮迅（ふんじん）が在る。美しい無智が在る。私は、しばらく、この態度に拠（よ）ろうと思っている。この態度は、しばしば、盲目に似ている。時には、滑稽でさえある。けれども、私は、「あらまあ、しばらく。」などという挨拶にはじまる女人の実体を活写し得ても、なんの感激も有難さも覚えないのだから、仕方がないのである。私は、ひとりになっても、やはり、観念の女を描いてゆくだろ

う。五尺七寸の毛むくじゃらの男が、大汗かいて、念写する女性であるから笑い上戸の二、三の人はきっと腹をかかえて大笑いするであろう。私自身でさえ、少し可笑(おか)しい。男の読者のほとんど全部が、女性的という反省に、くるしめられた経験を、お持ちであろう。けれども、そんなときには、女をあらためて、も一度見ることである。つくづくその女の動きを見ているうちに、諸君は、安心するであろう。ああ僕は、女じゃない。女は、瞑想(めいそう)しない。女は、号令しない。女は、創造しない。けれども、その現実の女を、あらわに軽蔑(けいべつ)しては、間違いである。こんなことは、書きなが

ら、顔が赤くなって来て、かなわない。まあ、やさしくしてやるんだね。
絶望は、優雅を生む。そこには、どうやら美貌のサタンが一匹住んでいる。けれども、その辺のことは、ここで軽々しく言い切れることがらでない。
こんな、とりとめないことを、だらだら書くつもりでは、なかったのである。このごろまた、小説を書きはじめて、女性を描くのに、多少、秘法に気がついた。私には、まだ、これといって誇示できるような作品がないから、あまり大きいことは言えないが、それは、ちょっと、へんな作法である。言い出そうとして、

流石（さすが）に、口ごもるのである。言っては、いけないことかも知れない。へんなものである。なに、まえから無意識にやっていたのを、このごろ、やっと大人になって、それに気づいたというだけのことかも知れない。言い出せば、それは、あたりまえのことで、なあんだということになるのかも知れないが、下手に言い出して曲解され、損をするのは、いやだ。やはり、黙っていよう。「叡智（えいち）は悪徳である。けれども作家は、これを失ってはならぬ。」

底本：「もの思う葦」新潮文庫、新潮社
1980（昭和55）年9月25日発行
1998（平成10）年10月15日39刷
入力：蒋龍
校正：今井忠夫
2004年6月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。